



Kumamoto University Library Bulletin, No.9, October 1994

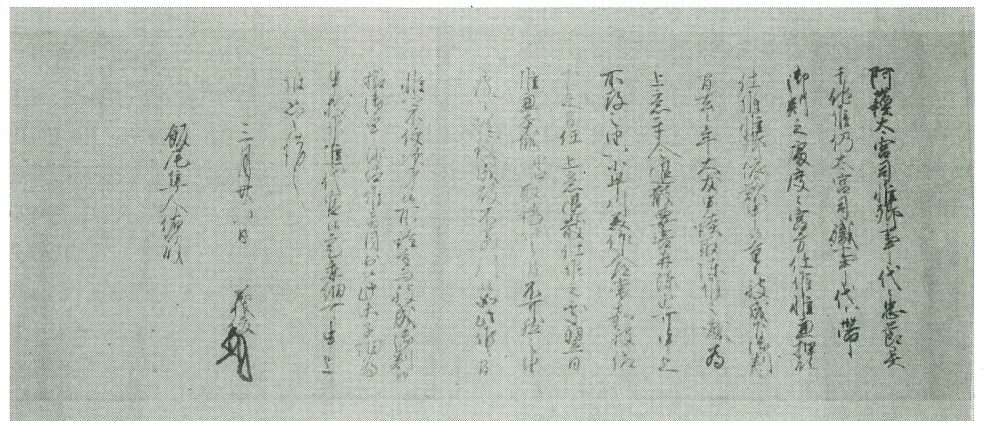
● マルチメディアとLAN

シリーズ熊本大学附属図書館特殊資料紹介 8

● 重要文化財 阿蘇家文書 (34巻36冊)

マルチメディアとネットワークを活用した

● 情報提供サービスのありかたについて



〔C〕 洪川義俊書状

(禮紙切封)

「――」

(天)

阿蘇太官司惟郷事、代々忠節異

于他候、仍太官司職事、代々帯

御判之處、度々官方仕候惟兼押領

仕候、惟郷依歎申候、重々被成下御判之

(親著)

間、去々年大友申談取陳候之處、爲

上意互令退散要害開陳、追可申上

(則平)

所存之由、以小早川美作入道常嘉、被仰

下之間、任 上意退散仕候之處、翌日

惟兼本城 水口 取誘候之間、不可然之由、

度々雖致成敗、不承引候、如此候之間、

惟郷不便次第候、所詮、重而被成御判候

様御申沙汰候者、目出候、此等子細爲

申披候、進代官候、定委細可申上

候、恐々謹言、

(應永卅一年)

三月廿八日

義俊(花押)

(貞連)

飯尾隼人佑殿

# マルチメディアとLAN

渡 邊 亮

日常的な会話などで「情報を得る」というと、「知識を得る」と解釈しても良いことが多いのですが、「情報」を「知識そのもの」と定義するとその意味内容の解釈が受け手によって変わり客観的な数量化ができないことから、情報通信の分野では「情報」を「知識を運ぶ媒体（メディア：文字、記号など）」と定義し（C. E. Shannon; '通信の数学的理論' 1948）、情報を量的に評価できるようにしました。以来、情報通信の目標のひとつは、限られた時間内に良質の情報を大量に送ることにおかれています。

そして、その目標達成のための基本的な方向は更に2つに分かれました。ひとつは大量に情報を送る通信線路を開発することであり、もうひとつは、文字、図形、画像、音声など送りたい情報の品質を損なわずに、できるだけ情報量を小さくするように圧縮する方法と有用なメディア間の変換方法を講ずることです。

このような流れの中で、遠隔地にあるコンピュータを相互に結んで資源や資産を有効かつ自由に利用したいという発想から生まれたコンピュータネットワークが、より一般的な通信機能をも担うことになりました。

さて、昨年補正予算で全国98大学にTCP/IPプロトコルを主流とする国際標準LANが敷設され、その中のひとつである本学のKUIIC (Kumamoto University Intelligent Campus) ネットワークも非常に高い関心をもって利用されつつあります。個々のLANを相互に接続するネットワークも大きな目的別に学術研究用、地域用、商用などが整備されてきており、さらにそれらがインターネットへ接続されることにより全世界の主要な地域との通信が可能となりました。

一説によると、全世界には3000万人のネットワーク利用者がおり、わが国の利用者はその1%に過ぎないと言われます。しかし、最近の情報技術の進歩とコンピュータネットワークに対する世間の過熱ぶりを見ると、今後の利用者は指数関数的に増加すると予想されます。

アメリカでは政府主導で「情報スーパーハイウェイ構想」が提唱され、数Gbpsという現在の通信回線の10倍以上の高速回線をはりめぐらす計画が進められています。わが国でも、民間通信企業に対する無利

子融資によって光ファイバー網を整備拡充する計画が発表されました。いずれも2010年頃が目途となることとです。

このような状況下で、インターネットを学術研究のみならずビジネスや社会的事業へ利用することが盛んに考えられ始めている訳ですが、その利用の中心的手法としてマルチメディアがあるといえるでしょう。国際標準のコンピュータネットワークの面白い点は、ある利用者が作成したアプリケーションソフトをニュースとして流したり、誰もが利用可能なデータベースに保持して置くとその価値を認めた他の利用者がそれを使用して広めることが可能なことです。政府や自治体などが標準的な情報基盤を提供し法的な整備を行えば、大勢の利用者がそれをどんどん活性化していくといった一面があるのです。

インターネットを介しての最も一般的なマルチメディア利用はデータベースの検索にあると思いますが、アメリカで作成され、最近日本でも利用が盛んになりつつあるGopherやWWW (World Wide Web)などは利用者により広まったアプリケーションのひとつで、データはいくつものサイトに分散していてもよく、利用者はそれを特に意識せずにアクセスできる点に特徴があります。また、マルチメディアの技術として見ればネットワーク型データベースに文字、画像、音などのデータを準備しておき、それをいくつものウィンドウで自由に組み合わせるハイパーメディアの機能を応用したものと推察されます。今後、各種のメディアを簡単に統合する技術やそれをネットワーク上で使いこなす情報操作の技術は急速な発達を遂げることは疑いがなく、その意味でマルチメディアは大きな花を咲かせると思われます。

しかし、たとえば、音声を生に近いデータとして扱えば、文字を送る場合に比べて2000倍以上ものデータを送る必要があり、画像ではさらに大量のデータが必要ですから、利用者が多いときには回線中のトラフィック（データ流量）が異常に上がることになるでしょう。標準化されたプロトコルでは、多数の異なる宛名をもつ荷札つき小包としての情報の塊が同一の回線を通りながら配送されるバケット交換方式を用いています



から、インターネットの入り口や出口に速度の遅い回線が接続されているとそこがネックになる可能性もでて来ます。この問題を回避する手段として、高速回線を用いる他に伝達すべき情報の圧縮や変換があります。

一般に、マルチメディア通信で用いられる動画像・音声などの情報圧縮技術は、波形など信号の性質に着目して圧縮する方式と情報を受容する際の人間の感覚的機能や情報を生み出す際の生成原理にまで踏み込んで行う方式があります。前者の場合は高々数分の一程度の圧縮にしか過ぎませんが復元したときの品質はよく、後者は、認識などのメディア変換をも含むもので非常に高い圧縮率（数十分の一～数千分の一）を期待出来ませんが、現在のところ、圧縮率を高めると復元時の品質が商用通信にはいまひとつという研究レベルにあるものが多い状態です。後者において問題となる人間の情報処理機能の解明は、ハイパーメディアのようなソフトウェアの操作によるデータ処理とは全く異質のもので、認知心理学や生理学や工学的解析とモデル化などを通して対象の本質にせまる姿勢が重要であることが知られています。

さて、現実には回線の速度があまり大きくない場合を含めて、トラフィックがやや高いネットワーク上でのマルチメディア利用の方法を考えなければならない訳ですが、それには次のようなものがあります。動画像の通信では、伝達する情報量を小さくする最も簡単な方式としてコマ落とし（静止画を3秒に1回更新など）が用いられます。また、顔の表情を伝える場合には、目と唇の動きが重要ですからそれだけを動画にしてあとは静止画にする、あるいは、それに顔の輪郭や外見としての主要な筋肉の動きの特徴を抽出、データとして保存し、それを引きだした受信側で動画像を再合成するといった手法が考えられます。また、物体の移動が重要という場合には、静止している背景と移動している物体を分離する技術を用いて別々に伝送し受信側で静止画の中の移動物体の位置にその形をはめ込むという手法も有効でしょう。

音声については、通常データベースは文字データからなるので、文字列を受け取った受信端末で音声を合成する手法が有効と思われます。これはテキスト合成とよばれるもので、文字列の解析に基づいて音声を合成していくもので、様々な合成方式の中で、受信端末が保有する音声素片（実際の音声からある単位で種々の波形を切りだしたもの）を文字列の分析結果に応じてつなぎ合わせる方式が良い品質を与えるといわれています。

画像にしても音声にしても、ネットワーク上のトラフィックを極端に上げないようにしながら臨場感を得るために、人間が受け取るときに重要と感じる情報のみを選択して送り、それによって合成する技術を用いることが必要になります。特徴抽出や合成のためのアプリケーションソフトは、当然、該当するデータベースの提案者が提供しなければなりません。

「地域社会にとって情報システムはどんな部門に必要か」というアンケート調査をすると、殆ど例外なく、医療、防災、教育、福祉などが上位を占めます。マルチメディアを扱う地域的なコンピュータネットワークが目的を定めて社会へ貢献し得るシステムとなることは十分期待できることですが、そのような実験的なシステムがいくつか考案されています。たとえば、専門医のいない地域医療や交通事故などの緊急医療で、ネットワークによって脳の断層写真などを専門医のいる病院へ伝送（ISDN回線で3秒に1回の更新）し、診断を仰いで対処するものとか、離島など過疎地域の教育をネットワークを通して行うのに、互いに遠隔地にいる教師と生徒の前にそれぞれ電子黒板をおき、ライトペンでそれに手書きの文字図形などを記入すると双方の黒板に現れて、丁度、一枚の黒板を共有している感覚で授業できるものなどがあります。在宅勤務や電子会議などは、ビジネス社会でよく話題に上り発展が期待できますが、比較的少数の人々を対象にしたシステムの実現には、行政やそれに近い機関の主導的な役割が重要になると思われます。

以上、私達の周辺に感じられるマルチメディアとLANの関わりを述べてみました。マルチメディアは、専用回線を使用する場合や必ずしもネットワークを対象にしないコンピュータの領域やケーブルテレビ、電話など専用の他のメディアとネットワークの共有的利用の場合には、トラフィックの制約が小さい分だけさらに多様な世界が開ける可能性があります。ビジネスを考える人の数だけアイデアがあるといわれる分野ですから、その推移には眼が離せないものがあり、今後の展開が楽しみです。

（わたなべ あきら 工学部教授 情報処理システム・総合情報処理センター長）

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介7

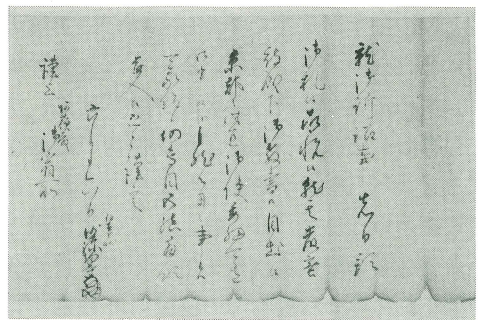
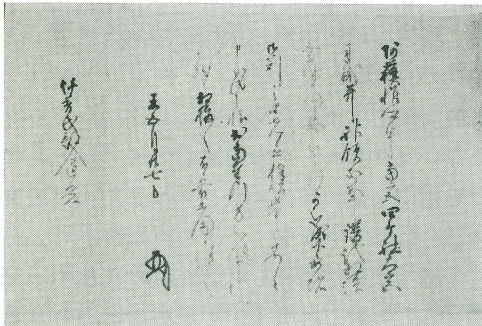
重要文化財 阿蘇家文書 (34巻36冊)

工藤敬一

前回紹介したように、大宮司惟澄から家督を譲られた嫡子の惟村は武家方から、父と共に官方として戦ってきた次子の惟武は官方（征西府）から、それぞれ本社大宮司職以下の本末社領ならびに恩賞地の管領権を安堵され、以来阿蘇氏は南北両朝に分れて対立する朝廷さながらに、両系に分れて対立することになった。それは南北朝合一後も続き、惟村系は矢部にあつて武家奉公と家督継承の正当性を主張し、惟武系は阿蘇南郷を根拠地に本社大宮職以下の相伝知行を主張する。一貫して武家方として活動し、九州探題や大友氏の支持を得る惟村系（惟村-惟郷-惟忠）であるが、南北朝合一後は、実質的に南郷を以て阿蘇本社領により強い影響力をもつ惟武系の惟政-惟兼の勢力を排除できない。応永11年(1404)10月、探題渋川満頼は、惟村を肥後の守護とし国人等に惟村への忠節を命じ、惟政と彼を支持する菊池武朝に対抗させ、同19年(1412)には父の譲りに任せて惟郷の大宮司職以下の権利を安堵した。しかしその正当性を確保するには室町將軍の

御教書の獲得が必要と考え、応永22年大宮司職以下の相続安堵の御判御教書を要請し、探題道鎮（満頼）も幕府奉行所に挙状を送った。そして道鎮はさらに同24年閏5月27日、幕府奉行人の一人である斎藤加賀守基喜と、伊香民部入道（均等）に担当奉行への取次を依頼した。〔A〕は伊香宛の依頼状である。しかし実際は本状以前の同年5月13日に將軍足利義持の御判御教書が、そして閏5月16日には幕府御教書が出されているので、両者は行違いになったものと思われる。8月道鎮は「御判」の旨に任せて惟郷の知行を安堵し、12月には肥後守護の菊池兼朝に大宮司職以下を惟郷に知行させるよう指示した。〔B〕はその間の6月6日に伊香均等が惟郷に將軍の御教書が下されたことを伝えたもの、周旋料として鳥目5結（5貫文）を受けとっている。そして惟郷はあらためて安堵の謝礼として幕府に50貫文を送った。

將軍（幕府）のお墨付をもらった惟郷は、応永29年（1422）探題と大友氏（親著）の支持を得て、実力によつ



〔A〕 渋川道鎮頼書状  
〔端裏書〕  
 〔探題〕 御雜掌伊香方へ被遺候御書  
 阿蘇惟郷申當宮四ヶ社大宮司  
 職弁神領等事、譜代相續  
 無子細候、仍忠節之仁候、可被成下安堵  
 御判之由、先立捧吹舉候、早々  
 申沙汰之様、於當奉行方被執申候者  
 可然候、相構く不可有等閑候、謹言、  
〔應永廿四年〕  
 壬五月廿七日 〔道鎮〕  
〔均等〕  
 伊香民部入道殿

〔B〕 伊香均等書状  
 就御訴訟事、先日預  
 御札候、承悦候、就其、嚴密〔密〕  
 被成下御教書候、目出候、  
 京都之時宜、御使委細可有  
 御申候哉、自然御用之事者、  
 可蒙仰候、仍鳥目五結拝領、  
 畏入候、恐々謹言、〔異筆〕  
〔應永廿四年〕「伊香方状」  
 六月六日 沙弥均等〔花押〕  
〔惟郷〕  
 阿蘇殿  
 謹上  
 御宿所



(注)

て南郷水口城に進出し合戦におよんだ。幕府は上使として小早川則平(美作入道常嘉)を遣して、互いに退散すべきことを命じた。[C](表紙参照)はこの間の経緯を、探題渋川義俊がみずからの立場で幕府奉行人の飯尾貞連に伝え、重ねて將軍の御判を惟郷に成し下されるよう申し入れたものである。この間惟郷と惟兼は京都で訴陳<sup>ソチン</sup>を番え、惟郷は、自分が上使の命令で退陣したら惟兼はその翌日に水口城に楯籠ったと非難し、惟兼は惟郷は元來甲佐一社を管領するにすぎず、水口城から退去するよう上使から命じられたのである、と

応酬している。なお、[A]や[C]が阿蘇家文書にふくまれているのは、判決に際し、関係書類が勝訴した方に一括して下付されたものと思われる。

両者の対立はその後も続き、宝徳3年(1451)、惟兼の子惟歳を惟郷の子惟忠の養子とすることが惟郷ら一族の老者によって決められ、ようやく統一に向うことになる。

(注) 水口城の位置は定かでないが、矢部から南外輪の駒返峠を越えた南郷側にあった惟兼側の一拠点であったとみられる。

(くどう けいいち 文学部教授 国史学)

## マルチメディアとネットワークを活用した 情報提供サービスのありかたについて

松 藤 典 生

通信やコンピュータ技術が猛烈に進歩している社会状況の下で、図書館消滅論なども飛び交う現在、標記のテーマは今後の図書館を左右する大きな課題であり、すでに避けて通れないものとなっている。社会の動向に影響されない図書館はない、ということは歴史的にも証明されており、日夜、図書館員の頭の中でぐるぐる駆け巡っている問題となっている。

### 1. ネットワーク

日本では、2000年頃をめぐりにNTTの通信網を現在のアナログ方式からデジタル方式に切り替え、改善する遠大な計画があり、これにより電子図書館(Digital Library)や電子新聞、双方向テレビなどが可能となるという。アメリカではゴア副大統領の提唱で、この上をいくスーパー光情報ハイウェー(ギガビット・ネットワーク)と呼ばれている計画がある。これはテレビ画像の200倍近い画像情報を瞬時に送れることから、遠隔地の医療診断やマルチメディア・テレビ会議、科学技術データの解析などが、この通信網を介して可能となる。政財官民等あらゆる機関や個人がn対nの情報交換が可能となり、図書館の知らないところで情報の創成・加工があり、情報交換があり、まさに図書館消滅論などはこのようなところから生まれているらしい。

### 2. マルチメディア

さて、最近のマルチメディアという用語のつかいかたであるが、多種多様な情報をやりとりする、多種多

様な媒体としての意味と、多種多様な情報そのものの意味、そして、それらを瞬時にやりとりできる通信網、の3つの意味を統合して用いられているように思われる。コンピュータ、通信手段、メディア、その他諸々の猛烈な技術進歩の前に、それぞれの境界線が不明瞭な状態、というよりは相互に関連し合わなければ成り立たない状態(技術)を結果的に包含した用語として、マルチメディアという言葉が使われるようになったのではないか。したがってマルチメディアとは多種多様な情報を伝達する媒体とか情報という意味だけに収まらず、さらに高速・大容量のネットワークを介してさまざまな情報の交換ができるという状態を言い表していると思われる。

ほんの少し前までは"ニューメディア"といわれ、ただただ"新しい何か"程度の意味しかなさなかったが、"マルチメディア"については、何かわからないなりに少しは具体性をもって語られているようである。ちまたに氾濫していた意味不明のBUZZWORDがようやく一人前になりかかろうとしているようである。

### 3. 図書館の情報提供サービス

日本とは10年の差があるといわれるアメリカでは「実験の段階が過ぎ、実用の段階に入った」という。現にインターネット上で展開されているモザイクでは、文字、音声、画像、を見事な手軽さで取り扱っており、ネットワークとマルチメディアという近未来情報化社会の2大キーワードをある程度具現化したものとして

注目されている。不特定多数対不特定多数の関係が成り立つネットワーク環境の下で大学図書館はどう対応していけばいいのか。明確な情報政策、ニーズに柔軟に対応出来る図書館組織、新しいタイプの図書館員、予算計画、データの安全性・品質の維持、著作権、課金や手続、などなど課題は山積みである。

しかし、まずは自館の目録データベースであるOPACを公開することや、CD-ROMやLAN対応のCDサーバの導入、そして有用なデータベースの紹介やネットワーク経由で入手出来る情報の提供（レファレンス）、また特色のあるデータベースの構築など、明確な情報提供の目的を持ち、常に利用者のニーズを感じとりながら、積極的に情報提供の経験を重ねて行くことが大切なことではなからうか。

紙、活版印刷、コンピュータと情報のメディアは変化してきた。そしてコンピュータはネットワークという強力な足を身につけ、ありとあらゆる情報を持って世界中を駆け巡っている。しかしまた一方、情報流通の裏には必ず物流があり、物流をささえているのは人である。人は資料を分類整理し、あるべき場所に配架する。あるべき場所とは書庫である。書庫とは情報のある場所という広義の意味とすると、これからの図書館は二つの書庫を管理しなければならない。一つは本、雑誌、新聞など現物が配架されている本来の書庫、もう一つはデータベースと呼ばれる書庫。この二つの書庫をバランスよく活用してこそ、利用者のニーズに添えていくことが出来るのであろう。

(まつふじ のりお 情報サービス課学術雑誌係)

## 図書館諸統計（平成5年度）

### I 受入統計

#### ① 年間受入統計

区分	館種	中央図書館			医学部分館			薬学部分館			合計
		購入	寄贈・その他	小計	購入	寄贈・その他	小計	購入	寄贈・その他	小計	
図書	和漢書	10,738	1,746	12,484	368	595	963	164	81	245	13,692
	洋書	4,312	2,377	6,689	263	1,745	2,008	37	354	391	9,088
	計	15,050	4,123	19,173	631	2,340	2,971	201	435	636	22,780
雑誌	日本語	2,048	2,654	4,702	179	494	673	42	77	119	5,494
	外国語	1,544	316	1,860	546	64	610	91	1	92	2,562
	計	3,592	2,970	6,562	725	558	1,283	133	78	211	8,056
新聞	日本語	10	16	26	4	3	7	6	3	9	42
	外国語	3	5	8	1	0	1	0	0	0	9
	計	13	21	34	5	3	8	6	3	9	51

#### ② 蔵書累計

区分	館種	中央図書館	医学部分館	薬学部分館	合計
図書	和漢書	631,564	66,621	14,151	712,336
	洋書	297,824	88,483	16,378	402,685
	計	929,388	155,104	30,529	1,115,021
雑誌	日本語	9,496	1,708	267	11,471
	外国語	3,331	1,822	261	5,414
	計	12,827	3,530	528	16,885



## II 利用統計

### ① 入館者数及び貸出数年間統計

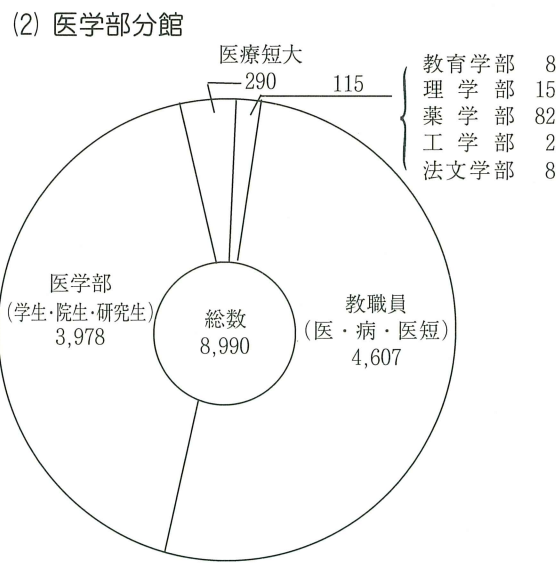
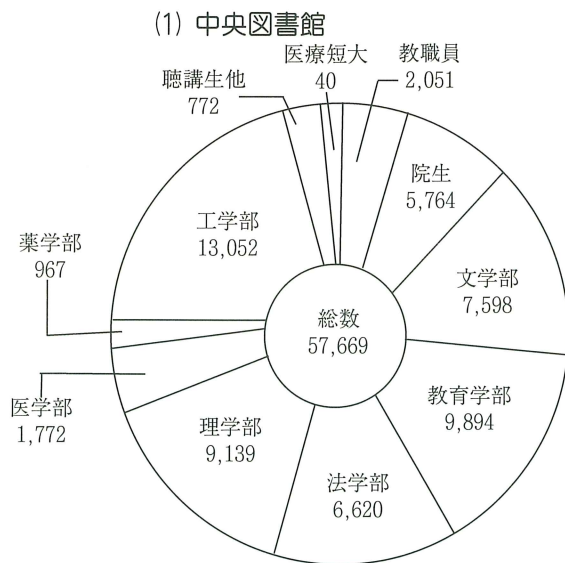
館種 区分 年月	中央図書館			医学部分館			薬学部分館		
	入館者数		貸出冊数 (図書のみ)	入館者数		貸出冊数 (図書・雑誌)	入館者数		貸出冊数 (図書のみ)
	入館者総数	(内数) 時間外入館者数		入館者総数	(内数) 時間外入館者数		入館者総数	(内数) 時間外入館者数	
平成5年4月	24,357	3,641	2,729	5,762	1,544	710	4,683	1,134	63
5月	31,834	7,018	4,865	6,307	2,530	882	3,944	1,790	83
6月	35,740	7,872	5,295	7,689	2,959	1,060	5,072	1,937	85
7月	27,304	3,512	3,324	7,881	1,108	796	4,413	825	111
8月	15,979	時間延長なし	1,791	5,412	時間延長なし	517	4,805	時間延長なし	29
9月	47,867	8,583	6,157	8,428	2,245	832	4,920	1,100	59
10月	36,200	7,400	6,492	8,646	3,622	678	7,173	2,888	71
11月	27,672	6,400	5,510	8,296	3,275	705	6,497	2,336	82
12月	27,835	6,733	5,921	7,440	2,458	639	4,548	2,066	87
平成6年1月	31,098	6,777	6,097	8,202	2,671	712	6,163	2,339	91
2月	43,342	9,721	7,072	10,202	4,607	884	7,987	3,508	100
3月	15,824	3,735	2,416	8,053	2,683	575	7,782	2,925	60
計	365,052	71,392	57,669	92,318	29,702	8,990	67,987	22,848	921

### ② 入館者数及び貸出冊数年次推移

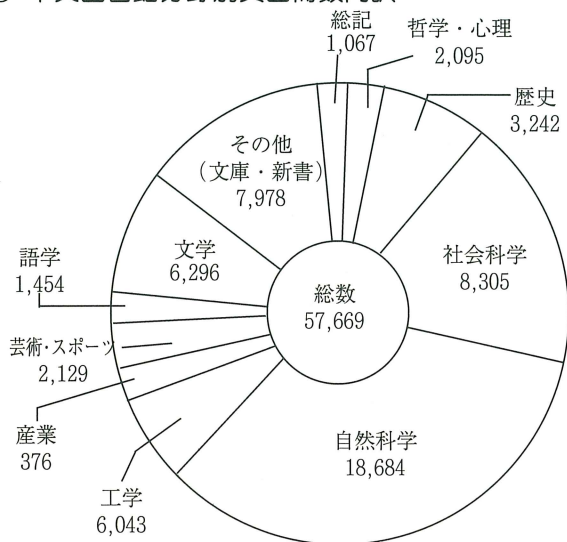
館種 区分 年度	中央図書館			医学部分館			薬学部分館		
	入館者数		貸出冊数 (図書のみ)	入館者数		貸出冊数 (図書・雑誌)	入館者数		貸出冊数 (図書のみ)
	入館者総数	(内数) 時間外入館者数		入館者総数	(内数) 時間外入館者数		入館者総数	(内数) 時間外入館者数	
平成元年度	17,588 329,490	54,820	5,484 38,785	97,925	29,555	21,824	52,314	—	467
平成2年度	33,983 302,165	58,960	5,388 36,343	115,763	57,630	20,012	61,173	—	785
平成3年度	35,345 318,029	64,319	6,267 39,779	107,314	33,920	15,824	69,134	18,653	1,138
平成4年度	351,976	72,199	52,441	106,113	26,996	10,882	72,725	17,473	1,030
平成5年度	365,052	71,392	57,669	92,318	29,702	8,943	90,835	22,848	976

\*中央図書館の上段の数字は工学部分室の統計で外数である

### ③ 貸出者所属学部別貸出冊数内訳



④ 中央図書館分野別貸出冊数内訳



⑤ 文献複写年間統計

区分 館種	学外依頼件数	学外受付件数	学内処理件数
中央図書館	2,996	2,340	4,685
医学部分館	1,724	5,109	263
薬学部分館	420	1,025	345
合計	5,140	8,474	5,293

⑥ 中央図書館文献複写年次推移

年度	学外依頼件数	学外受付件数	学内処理件数
平成元年度	2,387	1,974	2,114
平成2年度	1,871	2,238	2,830
平成3年度	2,931	1,921	4,189
平成4年度	3,603	2,178	2,002
平成5年度	2,996	2,340	4,685

⑦ 医学部分館文献複写年次推移

年度	学外依頼件数	学外受付件数	学内処理件数
平成元年度	858	6,532	667
平成2年度	590	3,444	533
平成3年度	918	3,366	322
平成4年度	916	4,426	244
平成5年度	1,724	5,109	263

⑧ 薬学部分館文献複写年次推移

年度	学外依頼件数	学外受付件数	学内処理件数
平成元年度	331	277	156
平成2年度	276	203	312
平成3年度	303	265	404
平成4年度	299	581	440
平成5年度	420	1,025	345

+++++

本学教官寄贈著書紹介

中村青史教授 (教・国文学)

徳富蘇峰・その文学

中村青史著 熊本大学教育学部国文学会  
1972.11

巨海玄道教授 (養・物理学)

Transport and thermal properties of f-electron systems

Edited by G. Oomi, H. Fujii and T. Fujita  
Plenum Press 1933

岸川俊明助教授 (工・I R)

放射化学の基礎

コルネリウス ケラー著, 岸川俊明訳  
現代工学社 1994.6

⑨ 全学統計文献複写年次推移

年度	学外依頼件数	学外受付件数	学内処理件数
平成元年度	3,576	8,783	2,937
平成2年度	2,737	5,885	3,675
平成3年度	4,152	5,552	4,915
平成4年度	4,818	7,185	2,686
平成5年度	5,140	8,474	5,293

⑩ 図書館間相互貸借統計年次推移

年度	中央図書館		医学部分館		薬学部分館		計	
	依頼	受付	依頼	受付	依頼	受付	依頼	受付
平成元年度	164	142	0	0	0	0	164	142
平成2年度	132	199	2	8	2	0	136	207
平成3年度	284	276	0	15	0	1	284	292
平成4年度	319	362	0	8	0	2	319	372
平成5年度	359	395	5	5	3	4	367	404



# 図書館カレンダー

(平成6年10月~平成7年3月)

	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	土◇	火 中○ 医・薬○	木○	日● 元日	水○	水○
2	日●	水○	金○	月● 振替休日	木○	木○
3	月○	木● 文化の日	土◇	火●	金○	金○
4	火○	金○	日●	水●	土◇	土◇
5	水○	土◇	月○	木○	日●	日●
6	木○	日●	火○	金○	月○	月○
7	金○	月○	水○	土●	火○	火○
8	土◇	火○	木○	日●	水○	水○
9	日●	水○	金○	月○	木○	木○
10	月● 体育の日	木○	土◇	火○	金○	金○
11	火○	金○	日●	水○	土● 建国記念の日	土◇
12	水○	土◇	月○	木○	日●	日●
13	木○	日●	火○	金○	月○	月○
14	金○	月○	水○	土◇	火○	火○
15	土◇	火○	木○	日● 成人の日	水 中・薬○ 医●**	水 中・薬○ 医●**
16	日●	水 中・薬○ 医●**	金○	月● 振替休日	木○	木○
17	月○	木○	土◇	火○	金○	金○
18	火○	金○	日●	水 中・薬○ 医●**	土◇	土◇
19	水 中・薬○ 医●**	土◇	月○	木○	日●	日●
20	木○	日●	火○	金○	月○	月○
21	金○	月○	水 中・薬○ 医●**	土◇	火○	火● 春分の日
22	土◇	火 中・医○ 薬●	木 中● 医・薬○	日●	水 中・医○ 薬●	水○
23	日●	水● 勤労感謝の日	金● 天皇誕生日	月○	木 中● 医・薬○	木 中● 医・薬○
24	月○	木 中● 医・薬○	土◇	火○	金○	金○
25	火○	金○	日●	水○	土◇	土◇
26	水○	土◇	月 中● 医・薬○	木○	日●	日●
27	木 中● 医・薬○	日●	火 中・薬● 医○	金○	月○	月○
28	金 中● 医・薬○	月○	水●	土◇	火○	火○
29	土 中● 医・薬○	火○	木●	日●		水○
30	日 中○ 医・薬●	水○	金●	月○		木○
31	月 中○ 医・薬○		土●	火○		金○

○開館日(夜間開館あり)

○開館日(夜間開館なし)

◇土曜開館日

●休館日

中：中央館

医：医学部分館

薬：薬学部分館

開館時間	
○	中・薬 9:00~20:00 医 9:00~21:00
○	中・医・薬 9:00~17:00
◇	中 10:00~16:00 医・薬 9:00~15:00

冬季休業期間 12月25日(日)~ 1月10日(火)
-------------------------------

注 臨時に休館するときや、開館時間を変更するときは掲示します。

●\*\*については、17:00~21:00の間、開館します。

## 日誌（平成6.5.1～8.31）

- 5. 17 古典籍研修会
- 5. 19 外国雑誌購入計画打合せ
- 5. 24 図書館報編集委員会
- 5. 26 附属図書館係長会議
- 5. 26 第65回日本医学図書館協議会総会(於東京)  
～27
- 5. 31 国立大学附属図書館事務部課長会議(於東京)
- 6. 9 附属図書館委員会
- 6. 16 附属図書館係長会議
- 6. 16 図書館報編集委員会
- 6. 17 図書館関係職員研修会〈初任者〉  
熊本県立図書館主催
- 6. 20 平成6年度目録システム地域講習会  
～24
- 6. 22 第41回国立大学図書館協議会(於伊豆)  
～25
- 7. 5 古典籍研修会
- 7. 12 熊本県ネットワーク委員会
- 7. 14 九州地区医学図書館協議会セミナー(於福岡)  
～15
- 7. 18 平成6年度大学図書館職員長期研修会  
～8. 5
- 7. 19 古典籍研修会
- 7. 28 附属図書館係長会議
- 8. 4 九州地区附属図書館情報管理課長会議(於福岡)  
～5
- 8. 26 第42回九州地区医学図書館協議会総会(於福岡)

## 目録システム地域講習会を開催

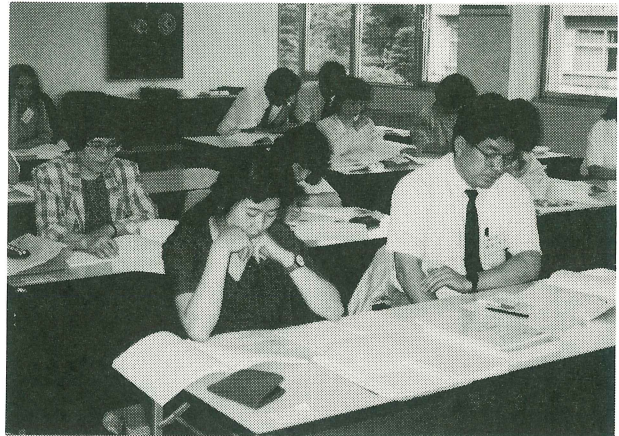
平成6年度目録システム地域講習会（学術情報センターと共催）が、6月20日から24日までの5日間、開催されました。

この講習会は、各地域の目録業務担当者が、システムの運用に関する知識と技術の習得を目的として行われているもので、熊本大学では4回目の開催となります。今回は、9大学から10名の参加があり、講義、実習、情報交換にと熱心に取り組んでいました。

なお、参加者の内訳は次のとおりです。

長崎大学 大分大学 大分医科大学 九州歯科大学  
別府大学 九州東海大学 熊本学園大学 熊本県立  
大学(以上各1名) 熊本大学(2名)

(情報管理課目録係)



## お知らせ

「第11回熊本大学附属図書館特殊資料展」を、下記の要領で開催します。

今回は特に熊粹祭の開催に日程を合わせ、図書館の一般公開も行います。

記

会期：平成6年10月30日(日)～11月1日(火)

時間：10:00～16:00

会場：附属図書館自由閲覧室(B1F)

出品資料：「群芳帳」「牡丹・芍薬生写」他

講演会：演題「肥後の博物学」

講師 熊本大学教養部教授 今江正知氏

日時 平成6年10月31日(月)13:30～15:00

東光原一熊本大学附属図書館報一第9号

平成6年10月

編集発行 熊本大学附属図書館

〒860 熊本市黒髪2丁目40番1号

TEL (096) 344-2111

FAX (096) 345-5240